

KCSSES

News letter No.34
MARCH 2019

第43回神戸女学院大学英語英文学会 (KCSSES) 大会報告

英文学科長 溝口 薫

今年度で43回を迎えたKCSSES (Kobe College Society of English Studies) は、本学英文学科に大学院修士課程が設立された際、大学院学生、修了生、学科卒業生の研究発表の場として設けられた英文学科主催の学会である。以来、特別講演と研究発表の二部構成で開催し、学部在生にとっても専門研究の面白さを学ぶ大切な機会となっている。今年度は、英米文学文化コースの担当で、大会の目玉である特別講演に、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授の阿部公彦先生をお迎えし、「日本人は英語がしゃべれない」問題について、英文学的見地からいろいろ考えてみる」という、英語を学ぶものにとっては大変興味深い題目でのお話をうかがった。

まず、阿部先生は、日本人が英語を苦手とするという現象を少し客観的に眺めてみようというわかりやすい切り出しでお話を始められ、そのような意識が生まれる事情を、三つの視点から説明された。まず、一つ目は、口語と文語という視点である。日本語では、口語と文語における言語使用には差が大きい、英語では少ない。この差異について意識しないまま日本語の口語観で英会話を学ぶなら、その上達は望みにくい。二つ目は、言語は常に個別的で特殊な事情において使用されるという視点である。言語が通じるためには、その場にあった語彙や表現をその都度必要とする。ゆえに、あらゆる場に通じる英語を学校教育に期待するのは筋違いである。とはいうものの、具体的で個別的な場に必要の語彙と表現を獲得することはまずは可能なことから、例えば、仕事で必要な特殊的言語使用に通じることは、上達の初めということになる。三つ目は、空間と移動に関する表現の言語差異という視点である。これについては、阿部先生が現在関心をもっておられる問題でもあり、アメリカの作家フランク・オコナーの短編小説の原

文と、阿部先生ご自身が翻訳された日本語文を用いての綿密な比較を通して、いかに両言語で、空間・移動を表す動詞の意味や機能に微妙な差があるか、それゆえ、翻訳表現においていかに様々な限界が生まれるかを大変わかりやすくお話くださった。その結果、聴衆一同は、日本人の英語苦手意識の背後に様々な誤解や短絡的反応があることに気づかされるとともに、文学に現れた空間表現の端々について丁寧と感じつつ読むことは、実は、日常使う英語の感覚を身につけるための確実な方法である、とあらためて確認することができた。

学会前半部においては、本大学院研究科で研鑽を積んだ卒業生の意欲的な発表を聴いた。発表とタイトルは、以下のとおり。姫野智子氏、「Blindness and Wordsworth's Art of Seeing」ならびに、山崎美保氏、「通訳ワークショップ ～学生の満足度や達成感をさらに高めるための一考察」である。一人は19世紀ロマン派詩人論、そしてもう一人は通訳演習を通しての英語教育論である。このように、まったく異なる領域の研究に触れてみるができるのも、本学会ならではの、である。在学生の皆さんには、キャンパスでの学びをさらに充実させるヒントを得るために、あるいは、今日の問題について深く切り込む知の世界の楽しさに触れることができる機会として、毎年11月の最終週金曜日に開催されるKCSSESを、ぜひ楽しみにしていただきたい。

特別講演

〈日本人は英語がしゃべれない〉問題について、 英文学的見地からいろいろ考えてみる

阿部 公彦

(東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 教授)

このところ、英語教育周辺が賑やかで話題豊富です。英語にかかわる教員としては、こうした動きは歓迎したいところですが、英語力向上とは関係のない思惑やビジネス目的の宣伝も多いようで、手放して喜ぶわけにもいきません。詐欺まがいの商法も横行しているようです。ただ、災い転じて福となすのは大事。これを機に、少しでも英語についていろいろ考えてみるのはいいことでしょう。

そこで今回の講演では、この英語教育論争でしばしば話題になる、「日本人は英語ができない」「しゃべれない」「使えない」という論点をとりあげます。私は英米文学を専門としておりますので、専門の研究で得た知見を生かし、果たしてこうした指摘は正しいのか、適切な対策とはどのようなものか、といったことを考えてみたいと思います。

もちろん私は、みなさんに「正解」を押しつけるつもりはありません。むしろみなさんから新たな知見を得られればラッキー！ というような心構えでうかがいます。ですので、私の問題提起に対して、是非ご意見をいただきたい。

具体的にフォーカスしたいのはよく耳にする二つの主張です。一つは「日本人は英語がしゃべれない」という主張。もう一つは、「学校で学んだ英語は役に立たない」「必要なのは実用英語だ」という主張です。

一つめのポイントについては、私はかねがね気になっていることがありました。これは英語ではなく、日本語のことです。対談やインタビューなどで自分の喋った言葉をテープ起こしてもらい機会がある

のですが、これを読むとひどいことになっている。はっきり言って「ぐだぐだ」なのです。とても書き言葉としての文章にはならない。おそらくこうした経験をされた方は多いでしょう。新聞記者や編集者の方は、みなさんこの話をすると大きくうなずいてくださいます。

当日は実際に映像を見ながら、私たちの「ぐだぐだしゃべり」のサンプルを確認し、その上で、英語話者のしゃべり方と比較してみたいと思います。

違いはかなり明瞭です。英語話者は、一度話し始めたら、きちんと「文」として整った形で最後までしゃべります。これをテープ起こしてみると、書き言葉としても通用することが多い。これに対し、日本語ではそうならない。

もちろん、英語でも話し言葉と書き言葉はちがいますし、言いよどみや言い直しも当然あります。でも、日本語と比べるとその程度の違いは明らかです。

いったいなぜこのようなことになるのか？

一つの明らかな原因は、日本語の「話し言葉ルール」だと私は考えています。一口に文法と言いますが、どの言語でも書き言葉と話し言葉のルールは違います。日本語では、このルールの違いがとても大きいのではないかということです。

明治時代、言文一致運動というものがありました。当時の書き言葉は漢文がベースになったもので、話し言葉とはかなり異なるものだった。これでは小説などで、書き言葉で日常生活のことを描いたり、心理を吐露したりするのが難しくなります。そこで小説家はより話し言葉に近い書き言葉をあたに編み出す必要に迫られました。その結果、「言」（＝話し言葉）と「文」（＝書き言葉）はかなり接近したと言われています。

しかし、両者は隔たりは依然として大きいようです。テープ起こししたときに私たちが「ぐだぐだモード」に直面するのも、そのためです。そして、私たちは英語を学ぶときにも、この日本語特有の「言」と「文」の乖離を念頭において英語を勉強してしまう。そこからさまざまな問題が生じているのではないかと、というのが私の考えです。英語では「言」と「文」の乖離は日本語ほど大きくないのに、日本語の乖離モデルをあてはめて、英語のオーラルコミュニケーションを、まるで書き言葉と別のものであるかのように学習しようとするところに問題がある、ということです。

もう一つのポイントは「使える英語」という概念で



す。たしかに私たちは、学校で英語を習うものの、いざ外国に行って英語でしゃべったり用を足したりしようとするといろいろな問題に直面する。そして「なんだ、せっかく長期間学校で英語習ったのに、意味ねえじゃんか!」と怒るのです。

しかし、ちょっと待って下さい。これはほんとうに学校の英語のせいなのでしょう。海外で私たちが直面するのはいったいどういう問題なのでしょう。

私がそこで提起したいのは二つの要因です。一つは現実に私たちが英語を使うのは、いろいろな意味で限定的で特殊な状況であるということ。つまり、私たちが生きる現実、たとえそれが日本語であろうと英語であろうと、具体的なものであり、個別的なものであり、あらかじめ完全に準備しておくことなどできないということです。ただ、この問題を克服するのはそれほど難しいことはありません。おのおのの状況に応じた語彙や表現を身につければすむのです。

もう一つはより重要で、かつ微妙なものですが、私が今、とても興味を持っている事でもあります。それは、私たちが英語の運用で苦勞するのは、「実用」にかかわることというよりは、「身体」や「空間」にかかわることだということです。1970年代あたりから、学校でおそわる「教養英語」よりも、TOEICなどで出題される「実用英語」の方が社会に出ても役に立つ、という主張をとなえる人たちが増えてきました。こうした議論は当初はある程度有効だったようにも思いますが、これが行きすぎて惰性になると、かなりおかしいことになってきます。

そこでこの点についていったん再度整理し直すことが必要ではないでしょうか。私たちが実際に英語を学ぶときには、どちらかというとシステムや制度にかかわる英語と、身体や空間にかかわる英語の二種類があると考えた方がうまくいくと私は考えています。システムや制度にかかわる言葉というのは（たとえば、法律の体系や、科学の法則などにかかわるもの）ある程度翻訳可能ですし、地域文化をこえて共有できる可能性が高いのに対して、主体が空間とどうかかわるかを表現するような言葉は、身体感覚やその土地特有の習慣ともかかわるので、かなり翻訳がむずかしい。「学校英語が役に立たない!」と文句を言う人は、どちらかというと後者で苦勞した人なのではないかと私は考えています。そもそも、後者は教室で勉強したり、テストしたりするのが難しいもの。そのあたりをしっかりと認識したうえで、学

校ではどのようなことを勉強するのが合理的か考えるべきだというのが私の主張です。そのあたり実例を示しながら説明したいと思っていますが、みなさんからのご意見も楽しみにしています。

発表要旨

Blindness and Wordsworth's Art of Seeing

姫野 智子

(神戸女学院大学大学院文学研究科英文学専攻
英文学コース 博士後期課程満期退学、修士(文学))

As it is little known, the English poet William Wordsworth (1770-1850) suffered from trachoma since he was 35. His serious problem of the eye however was long time only mentioned in the notes but did not affect the interpretation of his poetry. Following Heather Tilley's eye-opening research, this paper also focuses on Wordsworth's eye problems but mainly to understand the meaning of his "inner eye."

In *The Prelude* (1805) Wordsworth criticizes that in the time of the French Revolution, man has "not eyes wherewith to see, / Or seeing hath forgotten." At the same time, he distinguishes between the "vulgar eye" and the "intellectual eye" and tries to perceive the "great truth" with the latter one. Later in "I wandered only as a cloud" (1807) Wordsworth comes to express such "intellectual eye" as the "inward eye."

By focusing on Wordsworth's criticism in *The Prelude* on Godwin's theory leading man to "blind restraint," comparing with the "inward eye" that provides the poet "a bliss of solitude," this essay came to conclude that the penetrative eye, strengthened by weakening eyesight, is to see beyond past, present and future. It gives the equilibrium in inward and outward, active and passive, that confirms the universal "inward principle" of hope that Godwin's theory cannot explain.

発表要旨

通訳ワークショップ～学生の満足度や達成感をさらに高めるための一考察

山崎 美保

(神戸女学院大学大学院文学研究科英文学専攻
通訳・翻訳コース修了、修士(文学))

本研究では、通訳スキル向上に加えて、通訳教育の教養教育や社会教育としての側面を考察した。とりわけ、社会に出るにあたり有益で、通訳訓練において副次的に発生すると考えられる、正しい言葉遣いや学生各自の通訳スキルに対する自己効力感の向上を目標とした。ゲストスピーカーセッションでの評価や学生へのアンケート結果から、通訳訓練能力の構成要素であり、communicative competenceを構成する語用論的能力の一つである、場に応じた正しい言葉遣いは、定期的な会議通訳用語集のテスト、パフォーマンス時の正しい言葉遣いへの意識的な注意喚起、また正しい言葉遣いに特化した授業を設けたことなどによる、語彙ユニット(会議通訳表現を含む頻繁に使われる定型表現)の求心性の増大により、鍛えられたと考察される。また、自己効力感は通訳スキルの向上の過程の中で、語彙力・知識力アップ、実務経験を通して、また苦手なスキルの制御体験により高められたとの結論に至った。

国際学会発表(会員氏名ABC順)

* 姫野智子 氏

"Wordsworth and His Changing Understanding of Hope"

イギリス(レイダル・マウント)で開催された第48回 Wordsworth Summer Conference (2018年8月5日-15日)にて研究発表。

* 高雅妃 氏

"The Psychological Distance as a Part of Grammar"

韓国(ソウル KyungHee大学)で開催された2018 Linguistic Society of Korea Conference (2018年6月28-29日)にて研究発表。

*小杉世 氏

“Anthropocene Ecocriticism and Trans-Pacific Imagination of Wu Ming-Yi and Alexis Wright”

台湾（国立台湾師範大学）で開催されたThe 6th International Symposium on Literature and Environment in East Asia（2018年10月20-21日）にて研究発表。

“After 60 Years from the UK and USA Nuclear Tests: Narrative of i-Kiribati Civilian Residents in Kiritimati (Christmas Island), Kiribati”

フィリピン（パラワン州立大学）で開催されたUGAT Conference（2018年11月8-10日）にて研究発表。

“Island-to-Island Imagination: Wu Ming-Yi, Eunice Andrada and Kathy Jetnil-Kijiner”

香港（香港大学）で開催された国際シンポジウム The Space Between: Creativity, Performance and Impact in Contemporary Island Societies（2018年12月6-8日）にて研究発表。

*三宅伸枝 氏

“Yeatsian Laughter in ‘A Dialogue of Self and Soul’”

京都（京都大学）で開催された The International Yeats Society and the Yeats Society of Japan Joint Symposium in Kyoto 2018（2018年12月15-16日）にて研究発表。

*佐藤エリ 氏

“Fantastic and Realistic ‘Wandering’ in Female Bildungsromans: George Eliot’s *The Mill on the Floss* and Christina Rossetti’s *Speaking Likenesses*”

オーストラリア（Sydney大学）で開催された Bildungsroman: form and transformations, An International Conference at the University of Sydney（2018年11月22-25日）にて研究発表。

*立石浩一 氏

“Trimoraicity and Monomoraicity: Cases in Japanese”

南アフリカ（The Cape Town International Convention Centre (CTICC)）で開催された 第20回 国際言語学者会議（The International Congress of Linguists）（2018年7月2-6日）にて研究発表。

“How L2 Learners Perceive English Prosody”

福島（会津大学）で開催されたThe 2nd

International Symposium on Applied Phonetics ISAPh2018（2018年9月19-21日）にてShinobu Mizuguchi, Tim Mahrtとの共同研究発表。

“Lexical Accent and Focal Prominence in Japanese”

ニュージーランド（School of Languages and Applied Language Studies, Victoria University of Wellington (VUW)）で開催されたWorkshop on the Processing of Prosody across Languages and Varieties (ProSLang)（2018年11月29-30日）にて Shinobu Mizuguchiとの共同ポスター発表。

*Goran VAAGE 氏

“Hate Speech on Street Level in Japan- Interaction and Discourse between Hate Groups and Target Groups”

ニュージーランド（オークランド大学）で開催されたSociolinguistics Symposium 22（2018年6月27-30日）にて研究発表。

“プロフィシェンシーとしての「間」-「私のちょっと面白い話コンテスト」を用いた授業の実践事例から-”

イタリア（ベネチア大学）で開催された2018年 日本語教育国際研究大会（2018年8月3-4日）にて研究発表。

“Osaka Studies - Beyond the Myths”

ルーマニア（カンテミール大学）で開催されたJapan: Premodern, Modern and Contemporary Conference（2018年8月3-5日）にて研究発表。

“The Sociolinguistics of the Lost Decades and the Growth of Dialect Imagery and Humour”

イギリス（シェフィールド大学）で開催されたBritish Association for Japanese Studies Conference 2018（2018年8月5-7日）にて研究発表。

“Taboos of Storytelling in Japanese: Evaluations of Funny Stories Performed in the ‘My Funny Story Corpus’”

ポーランド（コペルニクス大学）で開催されたJAPANOLOGISTS’ PLAYGROUND 2018 @ COPERNICUS Conference（2018年11月29日-12月1日）にて研究発表。

会員による出版紹介(会員氏名ABC順)

◇別府恵子 氏

『女性と文学』『アメリカ文化事典』(アメリカ学会編、丸善出版、2018年1月20日) 560-561頁。

◇小杉世 氏

“Survival, Environment and Creativity in a Global Age: Alexis Wright’s *Carpentaria*.”

Indigenous Transnationalism: Essays on Carpentaria, Lynda Ng, ed., Giramondo, October 2018, pp. 135-158.

◇松縄順子 氏

『05 異文化コミュニケーションと会議通訳』『健康的存在』(共著、ナカニシヤ出版、2018年6月20日刊) 93-104頁。

◇Goran VAAGE 氏

International Perspectives on Translation, Education and Innovation in Japanese and Korean Societies. David G. Hebert ed., Springer, February 2018, pp. 149-158.

『限界芸術「面白い話」による音声言語・オラリティの研究』(定延編、ひつじ書房、2018年2月刊) 110-127頁。

◇山田由美子 氏

『アメリカ民主主義の衰退とニーチェ思想』(単著、人文書院、2018年6月刊) 454頁。

英文学科卒業論文・プロジェクトコンテスト

2008年から卒業論文および卒業プロジェクトのコンテストを開始し、今年度も担当教員からの推薦による10名の応募を受けつけた。2月に英米文学、グローバル・スタディーズ、通訳・翻訳の各部門で選考を行い、最優秀賞受賞者、優秀賞受賞者を次の通り決定した。

英米文学 (応募者 3名)

<最優秀賞>

該当者なし

<優 秀 賞>

E14116 太田垣 百合子

E15046 影山 姫花

E15085 村上 みなみ

英語学 (応募者 0名)

グローバル・スタディーズ (応募者 5名)

<最優秀賞>

該当者なし

<優 秀 賞>

該当者なし

通訳・翻訳 (応募者 2名)

<最優秀賞>

該当者なし

<優 秀 賞>

E15008 藤木 美帆

記念賞

2018年度、以下の学生に対して、次の学内記念賞が授与されました。

タルカット記念賞 E16019 後藤 優里奈

デフォレスト記念賞 E16143 首藤 和子

大島初枝記念賞 E16012 江島 つばさ
E16037 梶 さゆり

丹部トモ記念賞 GE1734 加藤 夢乃

アメリカン・ボード記念賞 E16111 小畑 陽奈子

会員近況

*中村真由美 氏

2019年3月をもって、プール学院退職。

神戸女学院大学英語英文学会 会則

(1995年 4月 1日施行)
(2005年 9月22日改訂)
(2010年 3月 2日改訂)

- (1) 名称
本学会を神戸女学院大学英語英文学会と称する。
- (2) 目的
本学会は本学英文学科卒業生および大学院英文学専攻修士生の学術研究の継続と発展を奨励し、それら研究活動の発表と交流をはかり、あわせて在学生の向学研究意欲を推進することを目的とする。
- (3) 構成
本学英文学科卒業生、大学院英文学専攻修士生有志および本学英文学科教員、元英文学科教員を正会員とする。在学生を準会員とする。
- (4) 活動
年一回、英語英文学会大会を開催する。
Newsletterを発行し、会員の活動、英文学科の現況、本学英語英文学会その他の活動の内容を報告する。
その他。
- (5) (a) 上記の活動運営のために運営委員会をおく。
(b) 運営委員会は、学科長、学科会計委員と、若干名で構成されるものとする。

内規

I. 大会での発表について

- (1) 発表希望者は毎年7月1日までに、発表論文の簡単なレジュメと略歴を添えて、英文学科事務室まで申し込み、K C S E S 運営委員会で審査の上、決定する。

II. 維持費・参加費について

- (1) 在学生を除き学会参加者は参加費 500 円を学会当日に納入する。
- (2) 英文学科教員は年に 500 円を維持費として納入する。
- (3) 維持費・参加費の徴収、及び郵送費などの経費の支出は、学科の会計委員が担当する。
- (4) (3) に関しては、K C S E S 専用の口座を利用する。



編 集 後 記

今年もKCSES学会参加の学生、院生、修了生の方たちから届いたレスポンスは、運営にかかわった者として嬉しかったです。会員の皆さまのご協力に感謝申し上げますとともに、皆さまの益々のご研究の発展を心よりお祈りいたします。

尚、厚かましいお願いで恐縮ですが、神戸女学院教育振興会へのご寄付をお考え下さいます際に、「英文学科学生のために」とお書き添え頂けますと、学生の学会及び研修会参加費の一部サポートのために用いさせて頂くことができます。ご理解賜りますと幸いです。よろしくお願い申し上げます。

KCSES Newsletter編集委員

(2018年度運営委員)

○Marcelo FUKUSHIMA ○溝口 薫 ○和氣 節子 (ABC順)

KCSES Newsletter No. 34

編集発行 神戸女学院大学英語英文学会

〒662-8505 西宮市岡田山4-1

Tel (0798) 51-8548 Fax (0798) 51-8532

<http://www.kobe-c.ac.jp/english/gakkai/gakkai.html>

2019年3月発行